C'n scene news

VOL. 83
千葉市美術館
Chiba City Museum of Art

［編集・発行］
〒 260-8733 千葉市中央区中央 3-10-8
TEL. 043-221-2311　FAX. 043-221-2316
Chiba City Museum of Art
3-10-8 Chuo, Chuo-ku, Chiba 260-8733, Japan
http://www.ccma-net.jp/
［発行日］2017 年 10 月 19 日
［印　刷］株式会社恒陽社印刷所

東西、美女くらべ。

1　2　3　4　5　6

4. 鈴木春信《浮世美人寄花 笠森の婦人 卯花》（部分）
中判錦絵　明和6年（1769）
William Sturgis Bigelow Collection, 11.19515
5. 鈴木春信《見立三夕「寂蓮法師」》（部分）
中判錦絵　明和4年（1767）頃
William Sturgis Bigelow Collection, 11.19455
6. 鈴木春信《桃の小枝を折り取る男女》（部分）
中判錦絵2枚続　明和3年（1766）頃
William Sturgis Bigelow Collection, 11.19448, 11.19506

Photograph ©2017 Museum of Fine Arts, Boston

1. 北野恒富《ポスター：サクラビール》（部分）大正2年（1913）
凸版印刷株式会社 印刷博物館蔵（全期間展示）
2. 北野恒富《暖か》（部分）大正4年（1915）滋賀県立近代美術館蔵（前期展示）
3. 北野恒富《鏡の前》（部分）大正4年（1915）滋賀県立近代美術館蔵（前期展示）

C'n scene news

千葉市美術館ニュース「C'n」83 号

特集 1
「ボストン美術館浮世絵名品展　鈴木春信」／「没後70年 北野恒富展」
担当学芸員対談
「東西美女くらべ」

特集 2
美術館の夏休み

連載 1
館長のつれづれだより
「海北友松の屏風のお値段」

連載 2
ボランティア日和

館長のつれづれだより
海北友松（かいほうゆうしょう）の屏風のお値段

長谷川等伯、狩野永徳に海北友松（1533-1615）を加えて、桃山時代の三大画家と言うことがあります。等伯と永徳は、すでに広く知られ、高い評価が与えられているのはご存じの通りです。これに比べて、友松の名はあまり知られていないと思います。

わたしは、その友松を大学院の修士論文に選んだのです。5 年前にこの美術館に就職すると、「専門の画家の展覧会を是非してください」。「楽しみにしています」。「何時、展覧会をしてくださるのですか？」など、主として美術館の周辺の方々から、折に触れてお話しがありました。「友松を知っていますか？」展覧会を開催しても「人は入りませんよ」、そう言いつつ、他館と共同企画を試みたことも実はあったのです。

あれこれするうちに、旧知の京都国立博物館学芸部長の山本英男氏が、ご自身の引退興業のように、友松の日本絵画史上の重要性と芸術性の高さを主張する展覧会を企画して、今年の 4 月にはそれを実現したのです。展覧会の反響、その評判は良く、予想以上の入場者があったとの報告がありました。

前置きが長くなりましたが、この展覧会には、海北友松が、京都の禅寺・妙心寺の注文で制作した三双の屏風の画料に対する領収書が展示されました。この文書は、かつて歴史家の高柳光寿氏が雑誌『国華』誌上に紹介したのですが、その後所在が確認されず、わたしもかねてから、現物を見たいと思っていました。それから 50 年あまり、親しくさせて頂いている妙心寺塔頭隣華院のご住職で美術史家の脇坂玄淳さんから「あなたが探していた、友松の文書が、妙心寺内の什物（じゅうもつ）調査で見つかりましたよ」との連絡を貰いました。わたしは、調査の機会を得て、改めてこの文書について考えたいと思っていました。

領収書ですから、屏風の値段が書いてある訳です。今の価格にしたら、それはどれ位の額になるのだろう。そんなことを漠然と考えていたところ、上記の展覧会に展示され、文書についての解説が加えられました。そこには、一双あたり現在の価格だと約 80 万円だとあります。安いですか、それとも高いでしょうか？一方、前述の高柳氏は、文書に書かれている領収額「銀子一貫目 竝（ならびに） 銀子二十枚」について、3 件ほどの根本史料を上げて、友松生存当時の米の価格などを拠り所に、論文発表の大正11年（1922）の貨幣価値に換算しています。それによると上記の礼金は、おおよそ9,000円から3,100円の間であると算出しています。

屏風を、空間を仕切るための家具と考えると 80 万円でもそう安くないと思います。そこでわたしは、家具としての屏風という観点から、美術商の古老で物知りの T 氏に、現在、金屏風一双を新調した場合の値段尋ねると、200 万円前後、有名百貨店だとその倍だろうという答えでした。つぎに、では大正時代にはどの位値段だったかを聞きました。おおよそ 1,000 円前後だろうとのことでした。であれば、そこは、2000 倍の差があります。これに従えば、大正時代に 3,100 円であったものは、現在は、620 万円。9,000 円であれば、1,800 万円になるということです。俗に美術商の間では、人気のない作家が描いた金屏風の画を、絵が描いてなければ、もっと高く売れるのにと冗談をいうことがあります。みなさんもご存じのように美術品の価格というのは、多くの人々が欲しいという作品を除くと決め難いところがあるのです。友松の作品にどの程度の需要があったかを、俄かに知ることは出来ません。しかし、絵が描かれていない金屏風より友松の描いた金地の屏風が安いということは考えたくないので、上記の金額を三双分の値段とすると、一双あたり、200 万円から 600 万円くらいの間、乱暴な仕方ですが、平均値だと約 400 万円となります。果たして 400 万円が妥当なのか、それとも 80 万円と考えた方が良いのかは、もう少しいろいろな資料を集めた上で考えた方が良いと思います。屏風の画料が画家自身の領収書によって知られるのは珍しい例であり貴重な資料であるので、この紙面をお借りして紹介することにしました。

［館長　河合正朝］

東西 美女くらべ

担当学芸員に聞きました！

江戸の美女を描いた春信の時代の始まり

田辺（以下「田」）：恒富が活躍するのは、春信の時代より140年くらい後からでしょうか。

西山（以下「西」）：絵描きとして自分の名前で制作を始めたのは、世紀の変わり目（1900年）頃からです。

田：恒富は金沢の人ですが、家は武士でしたか？

西：前田藩士族の家ですが、生家の正確な場所も分からないし、あまり情報が無いようです。金沢の、近江町市場の近くの生まれです。

田：春信は、神田白壁町の戸主という記録が残っています。おそらく大家さんみたいな、町人階級ではあったけれども、そんなに食べるのに困って絵筆を取ったというわけではないのでしょう。宝暦10年（1760）頃にデビューし、明和2年（1765）の正月、絵暦の交換会が流行するベストなタイミングで活躍を始めています。それまでは前の時代の絵師の真似みたいなことをやっているのですが、巨川と名乗る旗本（大久保甚四郎）がリーダーをやっていた絵暦交換会で、武士とか裕福な商人とかと交わって、急に技量を上げるというか、絵をとても洗練されたものにしていきます。もともと、そういう層とも交流があったのかなという気もしますね。
巨川はこの頃44歳、当時では初老に入っている。隠居して、もともと1600石の旗本って、結構なものですね。もう、江戸時代が始まって150年も経ち、普通の公務員だと部長くらいでしょうか……。それで、田沼政治が始まって。文化にとっては意外と緩みが良い方向に行くことはあるので、そういうところの良さを持っているような気がしますね。

春信の作品は、なんかロマンチックな感じというか、ほんわかした印象があります。

田：明和期（1764-72）の前の宝暦期（1751-64）あたりから、ちょっとロマンチックな主題や、一方で家庭的・日常的な様子、さりげない日常を描くものが非常に増えてきます。地方から来た人たちの集まりだったのが、100年も経てば江戸で生まれて育った人たちが出てくる。それこそ三代続けば江戸ッ子という時代になってきたわけですから、生活そのものに愛があるわけです。ここで暮らすことが、江戸で生まれて将軍様のお膝元で都市らしい恩恵を受けて、とても幸せ。子どもたちも丸々と育って。そういう愛着感がありますよね。

西：良い時代ですね。

自分たちの暮らしている町と文化への愛着ということですね。

西：新興都市が成熟してくるような、そういうことですね。

田：菱川師宣とかの時代だと、浮世絵が描くのは享楽的なもの、歌舞伎とか吉原とかそういうところばかりに集中していて、一枚絵も初期は春画が中心だったのですが、自分たちが普段暮らしている様子にすごく愛着を持っているという点が、この時代感でしょうか。

会いに行けるアイドルを描く

描かれているのが江戸の町のアイドルですものね、お仙ちゃんとか。

田：明和5,6年以前は、春信は巨川みたいなお金持ちのブレーンに囲まれていたと思いますし、そういった層を相手に錦絵を出していて、値段もとても高かったと思うのですが、この時代から、もっと大衆化しようと試みて、皆が知っているような主題、お仙とか評判娘の主題を出して、錦絵が一般大衆にも知られるようになっていきます【図1】。その後の浮世絵にもつながって行くという点では、春信は大きな仕事をしたといえるでしょう。錦絵時代になってから活躍したのは5年くらいなのですが……。
明和6年には、市井の娘の評判を読み物にすることが禁止されてしまうぐらいブームになったのだけれど、火付け役の一人が春信でした。後の時代、浮世絵で遊女の名前を出すのは普通のことになるのですが、それは春信が本格的に始めたことです。一般大衆がたくさん買うということで採算を合わせるような経済性を持つようになったというのが、まあ、その後の錦絵存続の秘訣であったと思います。

本当に庶民も買ったのですか？

【図1】鈴木春信《浮世美人寄花 笠森の娘人 卯花》中判錦絵　明和6年（1769）
William Sturgis Bigelow Collection, 11.19515

【図2】鈴木春信 平賀源内序 大田南畝著『売飴土平伝』
千葉市美術館蔵

【図3】鈴木春信《見立三夕「寂蓮法師」》
中判錦絵　明和4年（1767）頃
William Sturgis Bigelow Collection, 11.19455

【図4】鈴木春信《桃の小枝を折り取る男女》中判錦絵2枚続　明和3年（1766）頃
William Sturgis Bigelow Collection, 11.19448, 11.19506
Photograph ©2017 Museum of Fine Arts, Boston

ボストン美術館
浮世絵名品展

鈴木春信

Harunobu from the Museum of Fine Arts, Boston

「ボストン美術館浮世絵名品展 鈴木春信」
会期：2017年9月6日（水）～10月23日（月）
休館日：10月2日（月）
観覧料：一般1,200円（960円）、大学生700円（560円）、小・中学生、高校生無料
同時開催：江戸美術の革命－春信の時代

田：主題的に大衆化されても、この頃はまだ値段の高い方だと思います。材料とかあまり質を落としていないんですよね、他の絵師と比べて。後の磯田湖龍斎とかは紙もずいぶん悪くなっているし、サイズも小さくなっています。春信であれば、ちょっと高級品でも売れていたのだろうけれども、その後の時代の人たちは材料を少し落とさないと採算が合わなかった。
ところで、浮世絵が火付け役にはなったけれども、お仙ちゃんって、それより前の13歳くらいから美人と噂にはなっていたみたいですよ。

今でも、AKBとか、13歳くらいからでしょう？

田：春信が絵を描いている『売飴土平伝』【図2】、これは全部漢文なのですが、大田南畝が漢文で、「阿仙阿藤優劣弁（あせんあとうゆうれつのべん）」として、お仙とお藤どちらが美しいかというのを真面目に語るわけですよ。銀杏娘というのがお藤で、蔦のマークがお仙ですね。大人の皆さん、暇だったのでしょうか……。

これって、おじさんたちがやってるんですよね……。

西：AKBの総選挙みたいなものですね。

田：お仙につられてタバコ屋のおみっちゃんとかいろんな評判娘が出てきてね。

やっぱりみんな会いに行ったのでしょうか？こういうのが出回ると。

田：「（評判のおせんを）見に行って日が暮れてしまった」とか、書かれたものがあります。日暮里なので、「日暮れ」とかけてね。

オヤジギャクだ（苦笑）

西：AKBって、総選挙で上位に入る方は決してきれいなだけじゃないですよね。総合力というか……。お仙ちゃんとかお藤ちゃんの選考基準は何だったのでしょうか？

田：「優劣弁」によると、お仙はとても清純派。だから春信の描く絵にも合っているのでしょう。お藤の方はコスメショップの娘なので、都会的な感じがします。

西：お仙ちゃんの方が安心するんですかね、おじさんたちは。

やっぱりこういう浮世絵を買ったのはおじさんたちなんですか？

田：まあ、なんとも言えませんが、お仙ちゃんに関してはおじさん度が高いと思います。いくつか残っている例からすると。

今のAKBとかだと、同世代かちょっと下の世代の子どもたちまで騒ぐけれども……。

西：ファッションリーダー的な存在ですか？　女性から見た。

田：この時代のファッションリーダーというと遊女たちの方でしょうね【図3】。お仙もお藤も振袖も着てないし。

確かに地味ですよね。

田：普通、留袖で描かれるのは既婚者の記号でもあるのを、こういう風に描いているっていうのはね。やはり現実的に、襟が汚れては困るので黒襟とか、そういう普通の人たちとして描かれているわけです。それに、お仙ちゃんの髪型は流行りのものではないんですよ。これは別の人ですが、こういうたぼを跳ね上げる方が主流なんです【図4】。こういう風に描かれることもあるんだけれども、お仙の場合はあんまりチャラチャラしてないというかね。

西：そこがおじさんにグッとくるんですね。素人っぽさが。

田：でも結局、お仙はお侍さんのところへお嫁に行ってしまうんですよ、明和7年に。そしてみんながっかり！

おじさんたちがっかりですね（笑）

田：「ハゲ親父になってしまった」と（笑）。「とんだ茶釜がやかんに化けた」とうたわれています。茶釜はお仙、やかんはお父さんのことでしょう。お店に看板娘がいなくなって、ハゲ親父のみ、って。

西：それはがっかりだ。

田：お仙は役者絵にも登場しますね。明和5年か6年でしょうか。

では、まだ生きてる間ですね。

田：お藤も出てきます。だから、本当にアイドルですよね。わざわざお仙役というのが作られたんです。今となってはどんな芝居だったかわからないけれども。

春信美人の描きかた

西：春信の描く女性はよく中性的と言われますがその辺りはどうですか？素人が見ると、体の線とか、他の絵師と比べて中性的に見えるのですが。それは春信の好みなのか、時代の好みなのか。あるいはそういう風に意図はしていないのでしょうか？

田：意外かもしれませんが、浮世絵では、男女の図で、性別を体で描き分けるというのは師宣の昔からしてないんですよ。必ず若い男と若い女であることが大切で、絵という美しいものにおじさんやおばさんを登場させないというお作法が基本的にはあるわけです。今回、春信の影響を受けている作品も展示していますが、肉感的な感じを出さない、割と草食的な感じですね。

若い男女が並んでいたときに、パッと見素人には性別がわからないと思うのですが。

田：体型的にはほとんど変わらないので、髪型や着ているもので見分けるしかないですね。でも、春信の後の時代には、全く逆に、比較的肉体的な表現をするようになってきます。美人画って、その時々に好まれるスタイルを描く、流行ですからね。現代でモデルさんの好みが変わるみたいなことでしょう。

田：特に春信の少し前の時代から非常に男と女の描き方は近くなっていきます。

着物の感じも似ていますね。

田：男だって振袖着たんですよ、15歳以下は。やっぱり、清らかさとか優美さというのはこの時代に共通しているのでしょう。

最近でも男性アイドルは女性的じゃないですか。いかにも男らしいというより。

田：草食系男子というのがありますよね。

西：浮世離れした、ヒゲも生えない……。

田：ある意味人形みたいな。生々しいものじゃなくてね。汚らしいものをどけていって洗練されたものだけを残すっていう方向性がこのとき出てきたのでしょうね、春信が頂点で。その後、逆にもっと肉体派になったのが湖龍斎、今回出てないけれども歌麿、清長とか。

西：清長は、簡単な表現ながら、結構肉付きがわかる感じがありますよね。

恒富美人について

そんな春信と対照的な感じの恒富ですが。

西：恒富の出発は版下彫刻師なので、彫師なんですよね。

田：美人画のイメージがありますが、男女で体は描き分けるのでしょうか？

西：恒富は明らかに着物の中の肉体を描こうとしていますね【図5】。

田：それはやはり近代的な感覚ですよね。一般的に考えると、春信の浮世絵は手に取って見るものじゃありませんか。それに対して、恒富はある程度会場芸術みたいな時代ですよね。

西：西洋的な物の視方も入ってきていて、恒富は日本画家ではあるけれども、かなり当時の洋画の傾向などを取り入れている人でもあり、それまでの、体温や体臭を感じさせない美人を描くことをよしとしなかったところはありますね。あえて、ちょっとはげかかった白粉を描いてみるとか、半開きの口から歯がこぼれた瞬間を描くとか、そういう生々しさを。春信の時代とは、そういう意味では真逆かもしれません。でも、それはやはり文展とかでは嫌われて、結局離れて院展に行くのですが。

田：昔、大正時代の日本画家・甲斐庄楠音の展覧会を担当したことがありますが、やはり、日本画家の迷える時代とでも言うか、客観的に評価されるための日本画と日本画の方向性みたいなものが結構迷われる時代だったのかなと思ったりします。そして、昭和になると、急につまらなくなる。きれいになってしまいます。それもよしとするのか。その辺りはどうしてそうなったのでしょうか？

西：まずやはり、それまでの、「お手本を写して師匠の画風を継承する」というような日本画ではない、お茶屋さんで目の前に居る舞妓さんを描くとか、そういう、写実と言っていいかわかりませんが、それまでの日本画にはないリアルな感じを、明治の末あたりから恒富だけではなく追求したのでしょう。それまでの日本画に対するアンチという感じで、綺麗ではない、汚いものとか、露悪といっていいくらいの、そういうものが一時期現れます。それに加えて大きかったのは、大正期の個性というものを何より尊ぶ感覚ですね。

田：それは江戸との大きな違いですね。

西：明治が終わりかけて、画家の個性こそが重要だという時代になって。個の追求はモデルにも及んで、妊婦を描いてみるとか、日本画でも、あえて体型の美しくない人を描くとか、そういう方に行くんですよね。

田：春信と恒富は結構対照的ですね。一般的にもわかりやすく対照できるから面白いんじゃないでしょうか。

町娘を描いた春信に対して、恒富はプロの人を描いていたのでしょうか？

西：もっぱらプロです。そういう遊びは大好きで、長く家に帰らないこともざらだったようです。モデルは全て素人ではないと思いますよ。一瞬の化粧を直すところとか、生着替え、お座敷に出てるところ、舞のお稽古の場面とか、玄人さんたちの日常を描いています【図6】。

北野恒富展

没後70年

Kitano Tsunetomi

【図5】北野恒富《暖か》大正4年（1915）
滋賀県立近代美術館蔵（前期展示）

【図6】北野恒富《鏡の前》大正4年（1915）
滋賀県立近代美術館蔵（前期展示）

北野恒富《ポスター：サクラビール》大正2年（1913）
凸版印刷株式会社　印刷博物館蔵　（全期間展示）

「没後70年　北野恒富展」
会期：2017年11月3日（金・祝）～12月17日（日）
休館日：11月6日（月）,11月27日（月）,12月4日（月）
観覧料：一般1,200円（960円）、大学生700円（560円）、小・中学生、高校生無料
同時開催：所蔵作品展「近代美女競べ」
※会期中、一部展示替えを行います。
（前期：11月3日～11月26日、後期：11月28日～12月17日）

北野恒富《思出》大正前期
大阪新美術館建設準備室蔵（後期展示）

浪花情緒の画家の目

春信のところで、自分たちの町と時代に対する満足を絵の中に描くというのがありましたが、恒富はどうでしょうか？

西：恒富は結構複雑だと思います。金沢出身だけれども大阪に出ています、京都ではなくて。京都は日本画家がたくさんいたわけですが、大阪は少数派だった。恒富は、国画創作協会に対して自らがリーダーとなって大阪茶話会を作りました。でも、本人はやはり金沢の人なので、どこか大阪をよその国、異国として眺めていたようなところがあったようです。よく「浪花情緒」とか言われているけれども、それは恒富にとっては異国を描くような、外から見ているから大阪的なるものがよくわかるというか……。

田：描かれているのは大阪の芸者さんたちですか？ 祇園ではなくて？

西：そうです、道頓堀とか、あの辺りの。モデルさんを呼んで描くのではなくて、そこに飛び込んで居続けて描いたようです。

田：私小説みたいですね。

春信には、そういうところはないのですか？

田：具体的な生活や、家族のことは何もわかってないのは確かですね。浮世絵師はそんなに立場が上というわけではないので、職人の一人という扱いでしたから。

リアリティ。モデルを見て描く？

やはり、お仙ちゃんとかを描くために、春信も会いに行ったのでしょうか？

田：会ったかもしれないですね。でも浮世絵師は会う必要は全然無いのです、描く対象が誰であっても。たとえばリアリティがあると思われている広重でも京都まで行ったかどうかは微妙なところです。「東海道五十三次」の蒲原で雪が降るのか？とか、いろいろ不思議なことがあるのですが、結局絵師の頭の中で組み合わせて描く、絵空事の妙なので。

春信と恒富は何から何まで反対でしたね。美人を描いているというだけで。

西：恒富も、遊ぶのは好きだけれども身をもち崩すことはありませんでした。それと絵描きとしての立ち位置はまた別で、ちゃんと大阪画壇のリーダーとなり、売れる絵を描いて、お弟子さんをたくさん抱えていたわけです。

田：春信は飲みすぎで死んだという説がありますね。一説にある46歳没というのは、当時でもちょっと早い。お酒好きだったようですよ。

恒富はなんか冷めたところというか、引いたところがあるんですね。

西：女性に対する差別的な発言があると思えば、一方で何十人もの女性のお弟子さんを取っているんです。女性が絵を描いて生計を立てることについては賛成していたようで、お弟子さんたちとも対等にやっていた感じです。

大阪というだけで、ちょっと私たちには少し遠い感じがしなくもないんだけれど。

西：多分、よそ者として大阪を見ていたところは確実にあると思いますね。それは私たちと同じかもしれません。

話し手：
「ボストン美術館浮世絵名品展 鈴木春信」
担当学芸員 田辺昌子
「没後70年 北野恒富展」
担当学芸員 西山純子

美術館の夏休み

わくわく親子デー
8月7日(月)

本来は休館日にあたる第一月曜日を使って、親子で存分に展示を楽しんでもらえるようなイベントが盛りだくさん。
「わくわく探検号」では、オリジナルの電車を作って展示室へ。お気に入りの作品が見つかったら駅に見立てて名前をつけてみました。
「うらがわの秘密道具」では、インターンの学生たちが試作を重ねた鏡文字を解読するツールを制作。わくわくしながら展示室へと向かいました。

中学生のためのギャラリークルーズ '17
8月17日(木)・18日(金)

毎年恒例の夏休みの鑑賞プログラム。
一人で、友だち同士で、美術館に来てくれる中学生向けのツアーです。少人数のグループを組んだら、鑑賞リーダーと一緒に展示室へ。どんなものが好き?お目当の作品はあるかな?ギャラリークルーズでは、参加者の興味・関心に寄り添い、作品についてのおしゃべりを楽しみながら鑑賞を深めます。

ワークショップ：展覧会のうらがわ「ライティングの不思議」
8月11日(金・祝)

展示の裏方の中でも、最後の仕上げを左右する照明作業。当日は、美術照明家の竹下誠司さんを迎えて、様々な工夫をうかがいました。
展示室では、ライティングを変えてその違いを皆で考えてみたり、展示の裏側に迫るワークショップでした。

おしえて！「はてな先生」

展示室では、美術館ボランティアによる「はてな先生」たちが待っていて、作品鑑賞の相談にのってくれます。もちろん、夏休みの宿題だってばっちり。
ポスター・チラシの骸骨にひかれてか、会期中には中学生を中心に若い人たちもたくさん足を運んでくれました。

小学生お仕事体験
8月24日(木)

おとなになったらどんな仕事をしたい?
夏休みを利用して、小学生たちが様々な職場を訪問する千葉市の企画。美術館にもあわせて11人の子どもたちがやってきました。
いつもは入れない美術館の裏側も探検。展示室では、学芸員になったつもりで、自分が選んだ作品を紹介しました。

美術館で縁日気分!!
8月20日(日)

今年もやりました、縁日気分!
2階のバルコニーから「うらがわ」の骸骨も覗くなか、恒例の飴細工をはじめ、パワーアップしたカプセル・キャッチャーや、博物館学芸員実習生たちによるワークショップなども。近隣施設や千葉大学の皆さんによるブースも大盛況でした。

ボランティア日和 ーボランティアになってみた

鑑賞者の立場で千葉市美術館に来ていた頃は、「ここの展覧会は、いつも面白い企画だな」と思っていた。
その頃、ボランティアの募集があり、スタッフとして企画に携わってみるほうが、別の視点から楽しめるのではないかと思い応募した。
活動としては、ギャラリートークのトーカーをやらせていただいている。活動内容は、展示作品の解説を行い、企画展の見どころや、おすすめの作品をリラックスした雰囲気の中で紹介することである。
実際にトーカーを体験したところ、思っている以上に難しいことがわかった。お話をするために、学芸員からのレクチャーと図録の読み込みを中心に、自分の感じたことも解説に取り入れて、原稿を作成し暗記するといった具合である。しかし、いざ本番となると、これがどうも考えていたことと違った展開になってしまう。
緊張感からか頭の中が真っ白になったり、作品の展示場所を忘れて迷子になったりと、お客様に申し訳なく思う。こんな失敗をした時には、応援の先輩・同期の仲間に助けていただいている。
そんなトーカーの仕事ではあるが、千葉市美術館に来られているお客様は、大変優しい方が多く、トークが終わった時には「楽しかった」「面白かった」などの言葉をかけていただき、本当にありがたく感謝している。
これからも、美術に興味がない方でも美術館にくることが楽しいと思ってもらえるような活動をしていきたいと考えている。

［美術館ボランティア　茂木弘一］

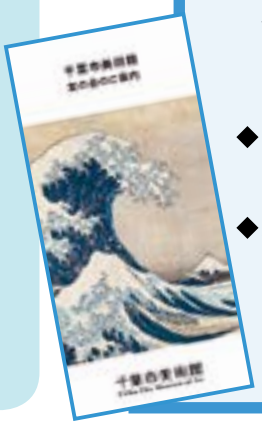
千葉市美術館 友の会はこんなにお得!

◆年会費 2,500 円で何度でも展覧会が見られる！

◆会員の同伴者が割引または無料に。さらに展覧会招待券もプレゼント！お友だちとご一緒に鑑賞してみては？

◆ミュージアムショップやレストランでも割引!

◆バスツアーなど会員限定のイベントも。



その他特典が盛りだくさん。
詳しくはパンフレットをご覧ください。
ご入会を待ちしております。